

知ってはいるが、信じてはいない ～「知と信の乖離」、その超克を目指して～

NHK大阪放送局 近藤誠司

1. 知と信の乖離

東日本大震災によって見出された教訓のひとつとして、大澤（2012）は、「知と信の乖離」をあげています。「われわれは、破局Xがありうることを知ってはいた。しかし、その可能性を信じてはいなかったのである」（p.58）。

ここで、防災・減災に取り組むアクターを、＜住民・行政・メディア・専門家＞と、大きく4つに分けてみた場合に、確かに、それぞれにおいて、「知と信」のアンバランスが生じていたように思います。

「想定外だった」と嘯いた防災担当者の中には、大澤の指摘したフレーズがぴったりあてはまる人もいたことでしょう。また、メディアや地域住民の中には、「知らないけれども、なんとなく信じていた」、「知りたくもなかったし、信じたくもなかった」といった、歪んだ構えさえも見受けられました。

2. 新想定騒動 ～防災・減災の主役はだれか～

東日本大震災を経て2年あまり。上述したような問題は、果たして克服できたのでしょうか。筆者のような「メディア（報道）」に属する者の“立ち位置”からは、かえって事態は深刻化しているように思えてなりません。

「南海トラフ付近の巨大地震」に関して、国は、段階的に「新想定」を発表してきました。その動きにあわせて、自治体レベルでも想定の見直しが進んでいます。新しい「数字」がリリースされるたびに、メディアは報道を一ときに、仕方なく一続きしてきました。こうした作業は、南海トラフに限られた話ではありません。日本全国の災害リスクが見直され、そのたびにニュースを賑わしてきました。

この間、「数字」を動かしていたのは、だれか。「騒いでいたのは、当然メディアだ」という非難は甘んじて受けるとしても、「数字」を作出していたのは、「当局と専門家」たちでした。すくなくともそこには、地域住民の出番はありませんでした。ブラックボックスの中から、驚くべき「数字」が、まるで津波のように襲来したに過ぎない。住民は、“主役”などではなく、ことの帰結として主役になれと言われる宛先でしかありませんでした。この構図は、「強制的自己決定」（Bauman, 2000=2001）そのものです。

3. 「信」をどうやって支えるのか

地域住民にとってみれば、「数値化されたリスク」を前にして一確率論的であれ、決定論的であれ、まずそれを「信じるのか否か（受け入れるのか否か）」、その態度を決めなければなりません。

どのように数字が操作されてきたのか、そのプロセスをすべて理解して、「この数字は所詮、その程度のものなんだな」と値踏みできる水準に達すれば、その判断はたやすいのかもしれませんが、そんなことはすくなくとも「非専門家」には無理です。では、「当局と専門家」たちや「メディア」の言うことをただただ「信じて」、鵜呑みにすればよいのか。それも、どだい「無理（嫌だ）」な話です。結局、事態はめぐって、リリース情報を「知ってはいるけど、信じてはいない」状態でやり過ごす、東日本大震災以前と同じ閉塞が待っているように思います。

そのような中にあっても、「知と信の乖離」を超克するための方策はないのでしょうか。そこで、ささやかではありますが、筆者らがいま取り組んでいる実践例を、当日、会場にてご報告したいと思います。